

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 4 月 24 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2008

課題番号：19520313

研究課題名（和文） 日本文化発信に関わった人々に関する研究：田村直臣を中心として

研究課題名（英文） A Study on Those who contributed to the Introduction of Japanese Culture: The Case of Naomi Tamura

研究代表者

梅本 順子（UMEMOTO JUNKO）

日本大学・国際関係学部・教授

研究者番号：40180799

研究成果の概要：

多方面において人道的、かつ教育的に活動した牧師、田村直臣という人物の足跡を、*The Japanese Bride* に代表される日本の風習や習慣を紹介するための英書の発行や、それに先立つ童話集の翻訳などの仕事を中心に、文化の受容、発信という視点からたどった。田村の多様な活動の背景には、四年あまりのアメリカ留学と、帰国後も五年に一度の割合で海外に出かけた経験がある。当時まれにみる国際人として、幅広い知識と卓越した語学力で日本文化を発信、かつ西欧の文化の受容と紹介に努めたことが明らかとなった。田村が先駆者となったものとしては、宗教教育の実践、児童文学の翻訳の際の言文一致体の導入などが挙げられる。また、アメリカでの *The Japanese Bride* という英文書籍の出版は、新渡戸稲造の『武士道』よりも早い。日本女性の窮状を、結婚をテーマに紹介した同書には、当時すでに男女平等を説く、田村の思想が表れていた。そのため、同書を日本で翻訳・出版するとすると、保守派のみならず、日本基督教会側からも圧力がかった。それが「花嫁事件」であり、田村は牧師職の剥奪という処分を受けるが、独立教会の牧師として、「児童」と「女性」の問題に生涯にわたって関わり続けたのだった。

交付額

（金額単位：円）

年度	直接経費	間接経費	合計
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	400,000	120,000	520,000
総計	900,000	270,000	1,170,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：比較文学

1. 研究開始当初の背景

田村直臣は、英語の書物で日本を外国に発信することにおいては、新渡戸稲造よりも早かったというのに、著書の *The Japanese*

Bride（『日本の花嫁』）の内容が不謹慎だとして日本基督教会からは牧師の職を剥奪されたため、あまり取り上げられることがなかった人物である。2003年に藤澤全氏との共編の『田村直臣、日本の花嫁・米国の婦人資料

集』を発行し、その中で田村の『花嫁』を和訳して紹介に努めた。田村の活動を理解するには、その足跡を、活動の原点であるアメリカ留学に求める必要があると考えた。

2. 研究の目的

(1) 田村が体験したアメリカ留学の実態を明らかにする。特に田村が受けた教育内容と、それから田村がどのような影響を受けたかを見る。

(2) 『日本の花嫁』(*The Japanese Bride*)は、どのような背景のもとで出版されることになったか。とくに、田村の女性観も含めながら、出版の目的とアメリカで出版することになった経緯を明らかにする。さらに日本で翻訳、出版しようとして起きた「花嫁事件」について、アメリカ人宣教師や同僚牧師がどのように対応したのかを明らかにする。

(3)(1)とも関係して、田村が学んだ宗教教育活動の一端としてのアメリカの児童書の翻訳事業について明らかにする。とくに「言文一致体」導入の先駆者としての田村の果たした役割を明らかにする。

(4) 途中で降りたという批判があるものの、田村がなぜ、またどのように足尾鉍毒問題と関わるようになったのかを見る。

3. 研究の方法

(1) 田村の留学体験の現地調査。田村の原点であるアメリカの神学校、ならびに大学での体験を明らかにするため、現地に残るさまざまな資料から田村の足跡をたどった。とくに、プリンストンの神学校には、日本に滞在していたアメリカ人宣教師がミッションボード(伝道局)に宛てて出した書簡も残っていたため、田村の「花嫁事件」(田村がアメリカで発行した英語の書物 *The Japanese Bride* の和訳・出版をめぐる日本で起きた宗教裁判)に対するアメリカ人宣教師の見解をその書簡に求めた。

(2) 田村による児童文学作品の翻訳について。日本に残るアメリカで発行された児童文学(リチャード・ニュートン作)の原典と田村の翻訳した児童書との比較から、田村の「言文一致体」への取り組みを明らかにした。

(3) 田村の社会活動。これに関しては、当時の新聞等の調査と彼に関わった人物に関する調査により跡付けた。

4. 研究成果

田村直臣は、アメリカのオーバーン神学校を卒業し、さらにプリンストン神学校、ならびにプリンストン大学にて学び、大学より心理学でMA(修士号)を取得した。正規の日本人留学生として神学校を卒業し、さらに名誉学位とはいえ、プリンストン大学で修士号を授与されたという点では記憶すべき人物である。いずれも日本人初であったというまれに見る秀才であった。さらに、新渡戸稲造の『武士道』よりも早い時期に、アメリカにて英語で *The Japanese Bride*(1893)という書物を出版したということは快挙であるものの、日本で翻訳版を『日本の花嫁』と題して出版しようとしたとき、日本の恥を海外に知らせるものとして激しいバッシングを受けた。保守派層はおろか、同じ日本基督教会の会員からも批判をうけ、宗教裁判の結果、牧師の職を剥奪されるという憂き目を見た人物である。

いわゆる「花嫁事件」によって一時話題の人となったものの、残した数々の業績のわりには知名度はそれほど高くない。その原因をさぐるとともに、終生、宗教教育活動と関わりあう一方、国際人として生きた田村の足跡を検証することが本研究のねらいとなった。

(1) 研究方法でも述べたが、壮年期以降の田村の活動の柱となった、アメリカ留学時代の足跡を辿り、田村がいかに学び、何を習得し、それをどのように活かしたかを、アメリカの神学校で受けた教育を中心に調査した。その結果、田村が受けた授業内容を中心に、当時の教育が明らかとなった。特に、プリンストン神学校で受けた教育は、いわば大学院教育であり、隣接するプリンストン大学(当時はニュージャージー大学)より、マコッシュ教授(総長)が、神学校にも出講していたこと、マコッシュ教授は神学校の理事もかねていたことなどが明らかとなった。田村は大学院生として奨学金を受けており、十名前後の小クラスで、宗教学や心理学を学んでいたことがわかった。後に田村は「宗教教育」という概念を留学時代に学んだと述べているが、帰国後の田村が日曜学校で熱心に行ったのがこの宗教教育であった。

(2) 田村が起こした「花嫁事件」に関するアメリカ人宣教師の手になる伝道局宛の報告書が数通、プリンストン神学校に残っていた。これらの中には、日本で行われた田村の『日本の花嫁』を巡る宗教裁判の様子が克明に描かれている。いち早くアメリカで教育を受け、知識ならびに

経験も積んだ田村であったが、その聡明さゆえに同僚牧師と協調することが困難であったことも見受けられる。田村は、留学前から日本女性の地位に同情的であった。いわゆる「女・子供」として軽視されていた、女性ならびに子供の権利の尊重を唱えたことは画期的であったが、当時の日本はそれを受け入れるには機が十分熟していなかった。

- (3) これは、(2)で述べたこととも関連するが、田村の一生を通しての仕事である宗教教育の柱は、自営館と称する苦学生のための施設の運営と、日曜学校での教育、幼稚園の運営(中年以降)であった。

自営館の運営資金を得るために、渡米して本を出版・販売し、かつ自分の事業を紹介する冊子をだしてアメリカ人からの寄付を募るといった手段をとった。この本こそ、『日本の花嫁』であった。再度渡米した田村は、アメリカではたいそう好意的に迎えられ、資金を募ることに成功したが、日本においては先に言及したように、田村のスタンドプレーとして批判を浴び、和訳した書物は発禁処分となり、かつ宗教裁判において牧師の職まで剥奪されるという憂き目を見ることになった。

の日曜学校においては、田村は独自のテキストを用いることを考案した。そのため、アメリカで発行された子供向けの書籍をいち早く翻訳して用いた。『童蒙道の菜』(明治13)と『童蒙道しるべ』(明治21)である。いずれも、アメリカで説教師としてならしたリチャード・ニュートンという人物の子供向けの著作から選んだ作品よりなっている。

前者の作品を仕上げたのは留学前であることからしても、田村の児童文学への関心の高さが伺われる。また、田村の児童文学への貢献は、後者の作品の翻訳にあたって、「言文一致体」を用いたことが大きい。現代読んでもさほど違和感がないくらいの仕上がりであるにもかかわらず、田村の児童文学書は宗教教育のテキストということもあって、一般には流布しなかった。そのため、児童文学に貢献した者ということでは、田村が取り上げられることはめったになかった。せっかく児童向けの教訓を含んだ数々の作品を翻訳・出版していながら、これまでキリスト教児童文学史の分野でしか取り上げられることがなかったのである。

田村は、「三遊亭円朝の作品から言文一致のスタイルを学んだ」と、書き残し

ているが、改めて田村の先見性と努力を評価したいものである。

幼稚園経営は、早期に宗教教育を行う必要性を唱えた田村ならではの発想から生まれた。田村を宗教の道に引き入れたカロザース夫人、ジュリアヤトゥル夫人らの影響が大きいと考えられる。

- (4) 田村のもう一つの活動として知られるのが、足尾鉍毒問題への関与である。社会問題として明治末期に大きく取り上げられた、足尾銅山の排水が引き起こした鉍毒問題は、社会主義者ばかりでなく、多くのキリスト教徒もその救済に駆り出した。宗教裁判以降、牧師の職を剥奪された田村は、隠棲しているかの感もあったが、その雄弁が買われて、再び表舞台に引きずり出されたのが、この鉍毒問題であった。皮肉なもので、田村を表舞台に引き出した人物とは、田村とは宗教裁判で敵対した人物であった。これからしても、田村という人物がいかに影響力を持つ存在であったかがわかる。

しかし、田村はあくまで宗教人であった。その弁にて救済の必要を訴え、多くの援助を獲得するのに尽力し、かつこの問題の重大さを広く世間に知らしめるという点で大きな成果を出したことは言うまでもないが、途中でこの活動から離脱したため、功労者として田村が取り上げられることはまずない。渡良瀬川に排出される精錬後の水が技術革新によりもはや汚染されていないと説明されると、事件は終結したとして手を引いてしまったからである。このために、田村の鉍毒事件との関わり方が中途半端だとして批判を免れないことも事実である。

そうはいうものの、田村のみならず、内村鑑三や松村介石などのキリスト教徒も途中で手を引いてしまっている。これらのキリスト教徒は社会主義者とは一線をかくしたのであった。田村らのキリスト教徒の救済は人道上の理由からの救済であったため、村の治水問題やその他の局面に鉍毒問題が移行するにつれ、善意の救済は行き詰まりを見せることになったのである。

また、キリスト教関係者の運動離脱の背景には、二十世紀初頭のキリスト教の布教運動の盛り上がりもあったといわれる。ただ、田村が活動から手を引いたのは、銅山からの排水が技術革新で浄化されているという、古河の技術担当者から説明を受けてのこととあって、相手の説明を鵜呑みにするナイーブさが、問題視された。そこに、宗教家である田村の

限界があるといえるかもしれない。

以上、多くのことに関わった田村直臣という人物を、留学時代とその抱負、帰国後の事業と花嫁事件、児童文学とのかかわりから考察した。なお、社会問題とのかかわりについては、花嫁事件の処分により、しばらく世間と距離を置いていた田村を、再び引き出すきっかけとなった事件として取り上げた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

梅本順子 「田村直臣と足尾鉍毒問題」『国際関係研究』(日本大学国際関係研究所)第29巻4号、87-102、2009年2月、査読有

梅本順子 「田村直臣と児童文学：児童書の発行を中心に」『国際関係研究』(日本大学国際関係研究所)第29巻3号、197-213、2008年12月、査読有

梅本順子 「田村直臣と花嫁事件：米人宣教師の報告を中心に」『国際関係研究』(日本大学国際関係研究所)第29巻2号、79-103、2008年9月、査読有

梅本順子 「田村直臣のアメリカ体験：内村鑑三と比較して」『国際文化表現研究』(国際文化表現学会)第4号133-145、2008年3月、査読有

梅本順子 「若き日の田村直臣：築地での体験とアメリカ留学」『国際関係研究』(日本大学国際関係学部国際関係研究所)第28巻3号、67-87、2007年12月 査読無

[学会発表](計2件)

梅本順子 「宗教教育家としての田村直臣：「女」と「児童」の視点から」国際文化表現学会(2008年5月8日)日本大学文理学部

梅本順子 「宗教教育家としての田村直臣：アメリカ留学を中心に」日本比較文学会東京支部例会(2008年3月15日)日本女子大学

[その他]

6. 研究組織

(1)研究代表者

梅本 順子 (UMEMOTO JUNKO)
日本大学・国際関係学部・教授
研究者番号：40180799

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし